

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや! 広島城



No.27

特集「芸州広島図」



写真1 芸州広島図 江戸時代 広島城蔵

平成22年の末ごろ、広島城に1点の資料の寄贈がありました。その資料は「芸州広島図」。和紙に墨で描かれ彩色がほどこされた絵図で、折りたたまれており、和紙の表紙が付いています。折りたたみ時のサイズは縦16.5×横11.5cmとコンパクトで、持ち運びにも便利そうです。広げると縦32.6×横67.2cm程度になり、そこには広島城と城下町が細かく描かれています。

今回の「しろうや!広島城」では「芸州広島図」をとりあげ、その魅力を紹介します。

これまで知られていた資料

江戸時代の広島の下町を描いた絵画資料のうち、最もよく知られているのは「広島城下絵屏風」(広島城蔵・広島市指定重要有形文化財)です。この絵屏風は、城下町広島を東西に貫く西国街道を鳥の目線と同様に南側上空から見下ろした鳥瞰図ちようかんずです。これは日本に古くからある伝統的な手法で描かれており、有名なものとしては「洛中洛外図屏風」「江戸図屏風」などが知られています。

江戸時代後半になると、くわがたけいさい 鍛形蕙斎の「江戸ひとめ一目図屏風」に代表される、遠近法などを取り入れて都市全体を俯瞰して一つの屏風などで表現する描写方法が発達します。こうした流れのもとで作られたと考えられる広島の資料としては、西側から広島城や城下町全体を俯瞰するかたちで描いた「芸陽広島茶碓山ちやうすヨリ眺望略図」(広島市市民局文化振興課蔵)や「広島全景図」(広島城蔵・写真2)などが知られています。



写真2 広島全景図 江戸時代 広島城蔵

「芸陽広島茶碓山ヨリ眺望略図」は、現在の^{おおちやうすやま}大茶白山（西区・佐伯区）から見た視点で描かれ、眼下を流れる七つの川、広島城と城下町の家並、新開が広がる広島湾岸部、および湾内・海上に浮かぶ島々や広島の東部に聳える山並みなどを見ることができます。一方、「広島全景図」は「芸陽広島茶碓山ヨリ眺望略図」と比べて広島湾岸部の描写や西部の川、東部の山並みなどはなく、空間的な広がりでは劣るものの、その分広島城や城下町の描写はより具体的で、建物や橋、堀、船・舟、道路などがより詳細に表現されています。しかし、「広島城下絵屏風」と比べると、人物がほとんど描かれてなく、人々の生活などを具体的に知ることはできませんでした。今回寄贈を受けた「芸州広島図」は、絵全体の構図は「広島全景図」とほぼ共通することから同系統の資料であると思われます。しかし、詳しく見ていくと異なる内容が表現され、また、資料の大きさは小さいものの「広島全景図」よりも多くの情報量が盛り込まれていることから、これまで分からなかった江戸時代後期の広島の城下町の様相が絵画資料によって再発見されることが期待されます。（玉置）

「芸州広島図」に描かれた風景

この絵図の特徴は「描写の緻密さ」で、決して大きいとは言えない紙面の中に、町の様子がそれはそれは細かく描き込まれており、当時の様子を視覚的に知ることができます。

例えば、この絵の中には多くの人が描かれて

います。写真3は広島城の南辺外堀の様子で、現在の中区相生通りの八丁堀—原爆ドーム前間の電車通りあたりを描いていますが、堀に設けられた土橋を侍が渡っている様子が確認できます。二本の刀を腰に差している侍や、槍をもつ従者の姿を見ることができますね。また、その下手には雁木（河岸の階段）が描かれています。これは現在の相生橋東詰め付近になりますが、そこにも天秤棒を担ぐ人や河岸に立つ侍などが描かれています。実はこの人々のサイズは5ミリ程度



写真3 芸州広島図（部分）



写真4 芸州広島図 (部分)

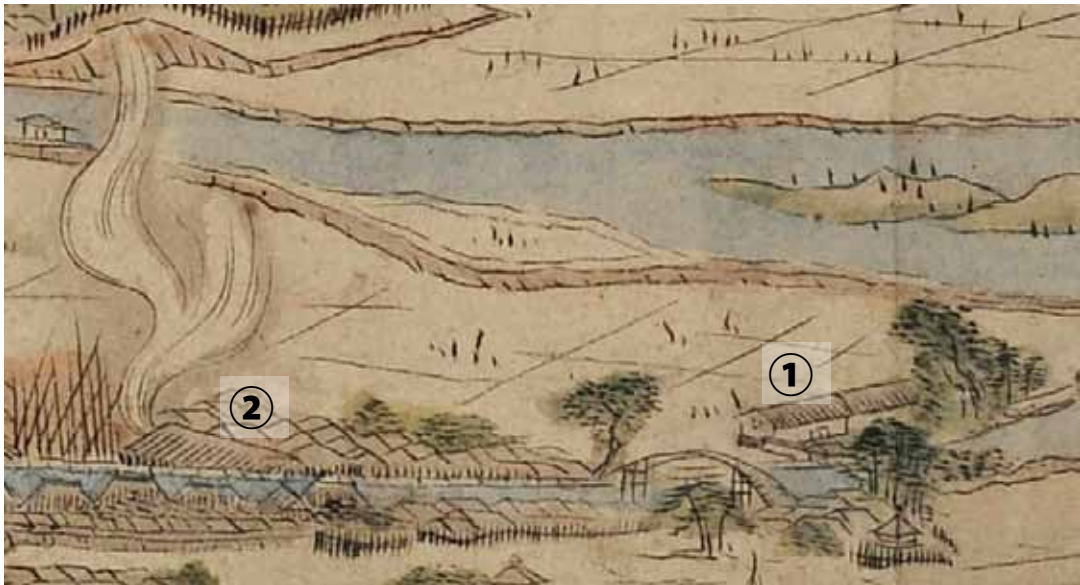


写真5 芸州広島図 (部分)

しかありません。こうした描き込みが絵図に生活感とリアリティを与えています。

この絵図の作者の細かさは、町の様子の正確な描写にも表れています。広島町を良く知った人間が実際に見て、几帳面に描いたものなのだと思います。文献史料でも確認できる城下町の景観について幾つか取り上げてみましょう。

一つ目は**写真4-①**の花並木。場所は京橋川の河岸で、当時の大須賀村(現在の広島市東区上大須賀町・若草町・光町一丁目・二葉の里三丁目・南区大須賀町・松原町)です。花は桃で、ここは当時「**桃林**」と呼ばれた花の名所でした。広島藩が作成した地誌「芸藩通志」によると、かなりの本数の桃が植えられており、花のシーズンになると侍も庶民も花の下をそぞろ歩きし、川に舟を浮かべて見物する人もいたようです。もともとは縮景園を頻繁に訪れていた藩主浅野重晟のために植えられたものなのですが、重晟が藩主だったのは宝暦13年(1763)から寛政11年(1799)にかけてのことです。さらに重晟は天明

3年(1783)から天明8年(1788)年にかけて縮景園の大改修を行っており、この時に設けたものかもしれません。

なお、画面右手、河岸以外の場所にも花が描かれていますが(**写真4-②**)、こちらは桜です。東照宮の参道沿いに植えられていたもので、当時「桜馬場」と呼ばれており、「桃林」と並ぶ花の名所でした。

次は米蔵です(**写真5-①**)。広島藩は米蔵を城下に幾つか設けていましたが、これは城下を南北に流れていた運河・平田屋川沿いにあったものです。現在、平田屋川は並木通り・地藏通りに姿を変えており、米蔵があった場所は、地藏通りの南端が駅前通りと交わる地点からやや南に下ったあたり(現在の中区竹屋町)になるでしょう。この米蔵は宝暦8年(1758)に設けられたことが、広島藩が城下についてまとめた地誌「知新集」に記されています。

この米蔵よりもやや左手に、煙がもくもくと上がっている建物があります(**写真5-②**)。「知



写真6 芸州広島図(部分)

新集」によると、この建物は「浜側建物」と呼ばれており、実はここでは陶器を焼いていました。広島藩の許可を得てここで陶器を作るようになったのは文化9年(1812)のことでした。

写真6は平田屋川の河口付近にあった稲荷神社と常夜灯を描いていると考えられます。場所は東千田公園(中区東千田町一丁目・広島大学の旧本部キャンパス)付近になると思われます。「知新集」によると稲荷神社は宝暦年間(1751～64)に造営され、常夜灯は寛政5年(1793)に設けられました。



写真7 芸州広島図(部分)

写真7の矢印の建物は住吉神社です。現在も同じ場所(中区住吉町)に鎮座しています。その背後に今は見られない入江が描かれています。これは藩の「舟入」で、藩船や藩主の御座船などが係留されていました。神社は舟入の入口に鎮



写真8 芸州広島図(部分)

座し、本川を行き交う船の航行の安全を守るとともに、広島藩の軍船の守り神でもあったのです。この神社がこの地に設けられたのは、「知新集」によると寛政10年(1798)のことでした。

「芸州広島図」の景観年代

写真8の矢印の建物は明星院(東区二葉の里)ですが、その左手には建物があるようには描かれていません。ここには天保6年(1835)年に饒津神社が建てられますので、この絵図はそれ以前に描かれたということになります。

さらにこれまで見てきた景観描写を合わせて考えてみると、この絵図に描かれている風景は18世紀末期から19世紀初頭である可能性が高いと言えるでしょう。

もしかしたら、絵図や参考にした記録に間違いがあるかもしれませんし、検証が不十分な部分もあるかもしれません。まだまだ、この絵図の検証は始まったばかりなので、今後もっと年代を絞り込むことができるかもしれません。職員も楽しみにさらに検証を続けています。

なお、「芸州広島図」は平成23年(2011)4月15日から6月5日まで開催する「広島城収蔵品展」において展示します。(本田)

しろうや!

広島城

編集・発行

財団法人広島市文化財団

広島城

〒730-0011

広島市中区基町21-1

電話:082-221-7512

FAX:082-221-7519

平成23年 3月16日発行



「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます

広島城利用案内

開館時間:9:00~18:00

(12月~2月の平日は9:00~17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料:大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日:12月29日~1月2日

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト